



【#5】三越のライオンのオハナシ

Text by 小助川駒介

Komasuke KOSUKEGAWA

妻が誘拐された。

仕事に忙殺されて、3日ぶりの帰宅。

徹夜明けの朝、鍵を使ってドアを開けると、

そこには人の気配のない濃密な静けさだけがあった。

窓もカーテンもきっちり閉じられて、

過ぎ去った台風の風の音だけが聞こえてきた。

テーブルの上に脅迫状が置かれていた。

白い紙に、新聞の文字の切り抜きが貼られている。

ドラマなどでよくみる典型的な脅迫状だ。

「女は預かった。戻して欲しければ、

明日の午後、銀座三越のライオン像まで来い。

警察には絶対に知らせるな」

脅迫状の文字は、ひとつひとつ切り抜かれ、

文字の間も丁寧にレイアウトされていた。

きっちりとした仕事は几帳面な妻そのものだった。

部屋の中はきちんと整頓され、

争った形跡はどこにもない。

実際の誘拐である可能性は、限りなく低い。

私は広告制作のプロデュースの仕事をしている。

ややこしいクライアントのややこしい案件で、

ここ数ヶ月ともに家に帰れる日がほぼなかった。

在宅でグラフィックデザインの仕事をしている妻と、

すれちがいの日々が続いていた。

妻との日常会話も最低限でしかなかった。

私はきのうが妻の誕生日であったことに気がついた。

自分の誕生日に、何の連絡もない夫。

その夫に対するささやかな復讐として、

自作自演の誘拐を咄嗟に実行に移したのではないか。

まじめな妻の性格からすると、冗談ではなさそうだった。

これが最後のチャンス、と妻は思っているのではないか。

おそらく妻は、どこかのホテルで一晩過ごし、

明日私が本当に三越のライオン像の下にいるのか、

確かめに来るのだろう。

仕事は既に終わったので、明日は予定が入っていない。

翌日。

私は銀座の小さなイタリアンレストランを予約した。

まだそれぞれが社会人になったばかりの頃、

初めてのデートで使った店だ。

銀座の花屋で、

妻の好きな白をベースにした花束を作ってもらい、
それを持って私は三越のライオン像の前に立った。

暦の上ではすでに秋。

銀座の街には残暑とはいえ少し風のある日だった。

グレーのサマージャケットに、濃紺のシャツ。

髭も剃り、髪も整え、

大理石の台座に凭れて私は妻を待った。

その時だ。

真向かいの和光ビルが大きな影で覆われた。

見上げると巨大な円盤型の宇宙船が静かに降りてきてい

る。

一連の出来事を見ていた人々は混乱し、逃げ惑った。

宇宙船は中空に留まり、そこから光の柱が地上に伸びてきた。

その光の柱の中を通り、一人の人間が降り立った。

それはまちがいなく私の妻だった。

妻はまっすぐに私に向かって歩いてきて立ち止まった。

「誘拐、されていたんだね。」

絞り出すように私は言った。

「そうよ。本当に誘拐されていたの。」

静かな声で、妻は答えた。